浦賀文化

［今月の題字は、夏を表す空色です］

平成17（2005）年7月1日
第2号
Email：uragabunka@yahoo.co.jp
ホームページ開設準備中

編集・発行：横須賀市浦賀文化センター　〒239-0822 横須賀市浦賀町7-1　電話＆ファクス 046-842-4121（毎月1回発行）

ドック跡地再整備計画

歴史・文化
自然・港のまち

浦賀の再生
事業化目標年次は平成20年度

二〇〇三年三月、明治期以降、浦賀の町の発展を牽引してきた造船所（住友重機械工業（株）浦賀工場・約十二ヘクタール）が閉鎖されました。京急浦賀駅前から浦賀港を取り囲むように立地しているこの造船所内には、日本で唯一の稼動できるレンガ造りのドライドックなどの貴重な歴史的産業遺産が集積しています。

横須賀市では、平成十四～十五年度に、地元市民や学識経験者などから「検討委員会」を組織し、造船所閉鎖後の基本的な土地利用の方向性について検討を行い「浦賀港周辺地区再整備計画」及び「事業化プラン」を策定しました。

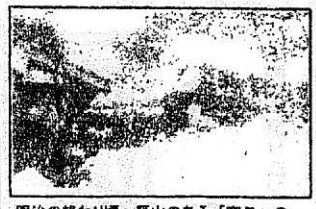
「再整備計画」では、まちづくりの目標を「歴史・文化・自然・港のまち――浦賀の再生」としています。また、当該地を四つのエリアに分け、エリアごとの特徴を活かした土地利用方針を定め、貴重な産業遺産を保存し、活用する「（仮称）ミュージアム・パーク」、及び浦賀の渡しを利用し浦賀港を回遊する「水辺プロムナード」を先導的整備に位置づけました。「事業化プラン」では、目標年次を平成二十年度とし、「（仮称）ミュージアム・パーク」については、産業遺産を実験的に活用するイベントを地元とともに行いつつ、将来の姿を探求することとしています。「水辺プロムナード」については、地元からの要望が強い西岸部からの整備を進めること、としています。

これらをうけ、平成十六年八月に、地元市民や住重などから「レンガドック活用イベント実行委員会」が組織され、産業遺産を紹介する「OPEN DAY ミュージアム」や昭和初期築造の工場を利用した「JAZZ コンサート」などを開催してきました。（以下、二面につづく）

町内の歴史
東浦賀一丁目（大ケ谷）
［語る人］宮井宣行さん（宮政商店）

むかしは蔵がたくさんあってね

江戸時代に東浦賀の千鰯問屋の代表格であった『宮与』には、築山のあるすごい庭があった。今はその宮原屋与右衛門の屋敷の一角に十二、三軒の家が立ち並んでいる。昭和三十八年頃、店の建替えのため、道路の向かい側にあった家をこちらに引いてきたという。浦賀では、昭和十三年にお酒が免許制になって最初の酒屋らしい。現在は周りにある地下水を利用して、店の地下にワインの貯蔵室があり、夏でもひんやりとしている。「この付近には、以前は呉服屋、魚屋、豆腐屋、肉屋、総菜屋、蒲鉾屋などがあったんですよ。今はほとんどなくなってしまって」と寂しそうに語る。


明治の終わり頃、築山のある「宮与」の雪化粧した庭

町内にある八雲神社の祭礼が毎年六月に行われる。東の青龍、西の白虎、南の朱雀、北の玄武の四神を祀り、威儀をととのえるのは浦賀ではこだけらしい。

また、高さ三メートルもある木彫りの厄除け人形『猩々坊』が町内を練り歩くのも目を引く。一九〇〇年を最後にしまい込まれていた『猩々坊』は十年前、九十五年ぶりに町内の有志等により修復された。（小倉、長島）

豊富な郷土の遺産
浦賀の文化の掘り起こしを

柿島和也館長

浦賀に赴任して一年余りになります。赴任して間もない頃の週末は、地名と実際の場所が一致せず、よく現地を訪れました。

海に迫って山がある風景……。司馬遼太郎著『街道をゆく 三浦半島記』の記述には、「浦賀湾の湾入が細くするどく、水静かで、市中を流れる川に見える……」とありますが、本当に静かな海です。神社の石段に立ち、東京湾から房総半島を眺める時、幕末から開国期にこの地に過ごした先人達も同じ場所にいて、まだ見ぬ外国をどう想像していたかに思いをめぐらすと、言い知れぬ感動を覚えます。

さて、浦賀の町を語る上で忘れてはならない人物の一人として、中島三郎助がいます。浦賀奉行所の役人としてペリーが浦賀沖に来航した際に最初にアメリカ側との折衝に活躍したことや、また、わが国で最初の洋式軍艦である鳳凰丸の建造を成し遂げたことで知られています。

『福翁自伝』の中に、咸臨丸での渡米から帰国して間もないころの福沢諭吉が幕府から謹慎を命ぜられていた折、中島三郎助の手助けを得て再び活躍の場が与えられたとあります。彼は中島のことを「旧浦賀の与力、函館の戦争に父子共に討死した立派な武士」であると評しています。

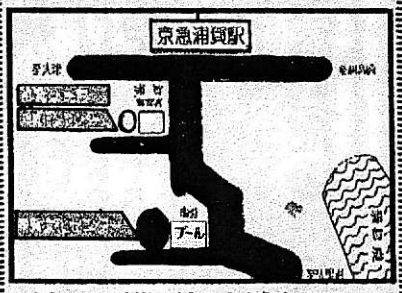
また、明治二十四年に中島三郎助の事跡を顕彰するために、彼を追慕する榎本武揚ら有志の手により愛宕山の山頂に『中島三郎助招魂碑』を建て、浦賀園（現在の愛宕山公園）を開園しました。

このように豊富な郷土の遺産に恵まれた浦賀の文化・歴史の掘り起こしは、この町を知り、将来を見据える上で欠かせません。浦賀文化センターでは、幕末の浦賀を再現した模型や写真などを展示しておりますので、皆様方に大いに活用していただければ幸いです（浦賀公民館館長）。

東西風

先月十一日、小雨のなか、為朝神社で虎踊りが演じられた。主人公の和藤内が、日中混血児だった幼少の鄭成功福松であることは云うまでもない。福松は明朝の崩壊期に南京の国子監に通う俊才だったが、学問では国難を救えないことを悟り、父親鄭子龍が残した海商の大船団を継ぐ。勃興する清に擦り寄った父親とは反対に、「抗清復明」をとなえて明朝の擁護にまわったのだ。その功績が評価され、国姓である朱元璋の「朱」を名乗ることを許された。国姓爺と敬称された所以である。ところが、近松の浄瑠璃ではなぜか「国性爺」と「性」の字が用いられる。諸橋轍次の説明によれば、「性」は「姓」の代用字になるそうだが、どうもしっくりこない。もっとも、そこに近松の独自性を見出すべきなのか。（中村）

郷土資料館
浦賀文化センター
（浦賀駅から浦賀通りを徒歩10分）



所在地：横須賀市浦賀町7-1
電話
ファクス：046-842-4121

平成17(2005)年7月1日（金）

発行：郷土資料館 浦賀文化センター

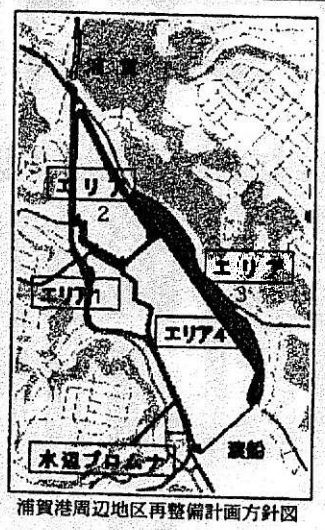
☎046-842-4121

浦賀の再生
事業化目標年次は平成20年度

（一面からのつづき）また、水辺プロムナードについては、西岸部の地質調査や基本設計などを行っています。

今後とも「事業化プラン」に基づいた先導的整備を進めつつ、「再整備計画」に沿った土地利用を誘導し、浦賀のまちの魅力を活かした街づくりを進めていきます。

（亀井泰治・横須賀市都市部都市計画課主査）



浦賀港周辺地区再整備計画方針図

〔右記方針図の説明〕

エリア1：レンガドック等の産業遺産を保全活用し、公園的空間を持つ「（仮）ミュージアム・パーク」。

エリア2：駅に近く浦賀湾を望む立地を活かし、行政・文化・商業・居住等の都市的機能と水辺空間が融合する「港と街の融合ゾーン」。

エリア3：水域の利用にあわせた港湾関連機能や水辺空間と調和した居住機能が立地する「水辺環境ゾーン」。

エリア4：天然の良港としての特徴を活かした係留施設などの「レクリエーション水域」。

笑話一題

四月から毎日のように文化センターに現れる小学一年生トリオの微笑ましいおはなしです。

学校からの帰り道にトイレ休憩をかねて、ここで一休みします。今日一番の出来事を話してから、また学童保育へと出かけていきます。

遠足の日にはリュックサックの中身を点検し、雨の日にはレインコートを整えて、元気に坂を駆け抜けて行きます。

大雨の日にびしょぬれで入ってきて、給食袋をランドセルの中につめ込みながら、「僕も中に入りたいな」と一言。一体誰が背負うんだろうね。（長島）

案内

●浦賀シネサロン

七月十二日（火）夜七時から、浦賀公民館会議室で浦賀シネサロンを開催します。今回は「近代百年の歩み＝大正、昭和①」を上映します。大変貴重な映像資料です。興味ある方は、ぜひ、おいでください。

●お稲荷さんミニ展示

「あるいて巡る浦賀のお稲荷さん」、「あるいて巡る東浦賀再発見」のミニ展示を当館一階で行っています。

●ミニ展示「会津藩と浦賀」

「会津藩と浦賀」のミニ展示を当館一階で実施中です。

●『浦賀志』勉強会

七月十九日（火）午後一時三十分より。興味ある方は、浦賀文化センターまでお知らせください。

収蔵品リスト

●西浦賀（宮下～船番所）の町並みの模型

絵地図を元に精密に再現した西浦賀の町並みは、当時の繁栄を蔵の数の多さや瓦葺きの屋根に見ることができます。奉行所・船番所と同じ六十分の一の縮尺にしてあります。

書評

湘南の誕生

〔湘南の誕生〕研究会編著（藤沢市教育委員会、一九九八年）

幕末から明治に至る時代、世界は蒸気船や汽車の発達による旅行ブームに沸き、その波にのって渡日した横浜居留地の外国人らによって江ノ島が「発見」され、後の湘南ブームに灯がともされた。日本人では徳富蘆花が『湘南雑筆』を著して、「湘南」という呼称が全国的な知名度を獲得する。その後、鉄道会社が営利目的で「湘南」を宣伝し、戦後の「消費を喚起するイメージ」としての「湘南」のブランド化へつづくと本書は説く。

古地図や写真を多数掲載し、第一部で、江ノ島、海水浴、江ノ電などをキーワードに湘南の誕生を検討。二部は、鉄道資本が誘導した行楽としての海水浴、別荘地文化などを論考し、三部は映像文化、出版文化が湘南をブランド化していく過程を検証している（中村）。

〔一八〇〇円、問い合わせ：藤沢市教委情報管理課☎〇四六六・二五・一一一一〕

歴史 語らい座・浦賀 ②

郷土史家 山本昭一

文化三（一八〇六）年一月十八日の午前三時ごろ、浦賀奉行・酒井近江守忠賴は数人のお供を連れて、伊豆下田へ向けて出発した。冬の夜明け前にもかかわらず奉行所関係者はもちろん、廻船問屋など大勢の浦賀の人に見送られての旅立ちであった。

前年の三月に浦賀奉行に就任した酒井にとっては、初めての下田視察旅行であった。

奉行一行は、この日のお昼を過ぎたころには藤沢宿に着いた。しかし、この藤沢宿で酒井奉行の体調が悪くなり、旅を続けることを断念して、急遽浦賀へ戻る事にした。この知らせは、浦賀へ急飛脚で先触（さきぶれ）として到着した。

現在であれば、藤沢の病院で手当てをしてもらうとか、その様子を携帯電話などで刻一刻知らせることができるが、江戸時代後期ではいくら奉行の権威をもってしてもリアルタイムで知らせることはできないだけに浦賀の人々にとっては心配が一層募っていた。

奉行急病の知らせを受けた浦賀では、東西の村としては、三方問屋（船改め業務の下働きを行なう東西と下田問屋を総称した言い方）を出迎えに向かわせることにし、旅支度ができた廻船問屋を三、四人で一チームにして、一刻も早く奉行一行に接触させるべく送り出そうとしていた。

奉行 病気で辞職 旅先で発病し、浦賀の町は大騒ぎ

また奉行所内では御出入りの医師の谷口玄俊を呼び、残っていた奉行用人（奉行の秘書官）をつけて出迎えに向かわせようとしていた。

しかし、次の知らせが来ると、あまり大騒ぎをせず、出迎えもできる限り控えるようにとの指示が奉行のお供をしていた者からあった。

奉行一行が浦賀に到着したのは、暮六つ時（午後六時ごろ）であった。通常であれば奉行の病状を心配して、すぐさま御機嫌伺いに行くところであるが、この日は行かず、翌朝にすることを申し合わせた。

奉行所の役人たちは、浦賀奉行所が管理する下田の御用所（下田は海上だけが浦賀奉行所の管理するエリアであり、浦賀奉行所の同心二名が勤務していた。陸上は江川代官の支配下であった）へは視察旅行が中止されたことが船便で通達された。

酒井近江守の病名は記されていないのでわからないが、病状は一向に回復せず、二月五日には江戸の湯島妻恋坂にあった自分の屋敷に戻る事になり、下田と三崎の視察旅行は秋まで延期されることが言い渡された。しかし、それでも病気は回復せず、この年の五月に辞職願が提出され、辞任した。

酒井近江守忠賴の署名と捺印

原稿募集

投稿を歓迎します。字数は四百～八百字を目安に。優れた原稿は本紙に掲載します。編集部で趣旨を変えずにリライトすることがあります。